

【2018年3月30日発行】

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニューズレター38号

<http://jsics.org/>

日本国際文化学会事務局

多摩大学
グローバルスタディーズ学部事務室内
〒252-0805
神奈川県藤沢市円行802番地
Tel: 0466-82-4141
Fax: 0466-82-5070
email: jsics@gr.tama.ac.jp

「知の基盤を磨く」という言葉をいただいて

日本国際文化学会会長 岩野雅子



新たな年を迎え、会員のみなさまにおかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

日本国際文化学会は、設立から18年という年月を乗り越えてきました。確固たる信念のもと、学会設立趣意書を生みだし、手探りの努力を続けながら

学会運営を軌道にのせ、新しい仲間の輪を広げながら、「国際文化」という新しい学問分野の拠点として成長させてこられた歴代の顧問、会長ほか役員や委員、常任理事会や理事会、会員、賛助会員、そして事務局等の方々への感謝の思いでいっぱいです。

本学会も人間に例えれば18歳。選挙権という未来への自己決定権を与えられ、長い歴史や大きな組織をもつ「大人達」の仲間入りも間近です。未来の、大きく成長をとげた国際文化学会から18歳となる今を振りかえると、あの頃はあんなにワクワクしながら、いろいろな試練に挑戦していたんだ、と感慨深いものがあるのだと思います。その未来に続く道を、みなさまのお力添えでこの一年も努力を重ね、着実に歩いていくことができればと願っております。

一方、大学教育の現場では、現在の若者には未来を描くのが難しい時代となっていることが痛感されます。期待よりも不安のほうが大きいようにも見えます。こうした今だからこそ、未来の職業、社会変化、世界情勢だけでなく、人間関係、情報、ストレスにも向き合い、人間とは何か、人生とは何か、人間の文化とは何かといった根源的な問いをめぐって、若い人たちとともに模索し、問題意識を高めていくことが、今まで以上に大切な時代です。

そんな折、「知の基盤を練磨するベースに 配架された物理的な『本』に触れる大切さ AI時代に備えるための『知の再武装』」〈※〉という一つの記事が目飛び込んできました。2018年度の全国大会をお引き受けいただく多摩大学の学長、寺島実郎氏へ

のインタビューをもとにまとめられたものです。バーチャルな視覚情報が氾濫する今こそ、知の巨人たちの息づかいを伝える書物を実際に手に取り、生きた知をもつ多くの人に出会うべき。これこそ国際文化学会がいま問うべき課題のひとつと直感して、この記事を常任理事会で共有しました。その結果、みなさまの賛同を得て全国大会のテーマ、そして基調講演などにとり入れることになりました。また、2017年度に宮崎公立大学がお引き受けくださった全国大会では、大会前日のエクスカージョンでの学びが大きかったことを踏まえて、2018年度も前日にエクスカージョンを組んでいただけることになりました。本年7月に開催する全国大会には、ぜひ多くの方々のご参加をお待ちしております。

この間、学会年報『インターカルチュラル』への論文投稿数の増加、ニューズレターにより若手会員の声を届ける企画提案、ICCO文化交流創成コーディネーター資格認定制度への参加大学数増加、短期集中セミナーを京都から沖縄に移しての新たな挑戦などなど、会員の方々の情熱、献身的なサポート、ミッションに対する責任感など、頭が下がることばかりです。昨年4月からお引き受けさせていただいた会長の立場ですが、みなさまのお陰をもちまして、やっと一年目を無事終えるところまで参りました。今年度もどうぞよろしくお願い申し上げます。

終わりに、みなさまへのお願いです。

ひとつ目は、一人でも多くの同僚、若い学生を、全国大会にお連れいただきたい。

ふたつ目は、国際あるいは文化といったキーワードに重なる人を会員にお誘いいただきたい。

みつ目は、何か学会活動の一つでも参加していただき、国際的な文化の力で人や地域や社会に影響を与える助けをしていただきたい。

こちらからお願いするのを待つのではなく、ぜひ、みなさまのほうからこちらにお声や新鮮なアイデアを届けていただけるのをお待ちしております。〈※この記事は、朝日新聞(2017年10月1日、10版、p12)に掲載されました〉

2018年度第17回全国大会

「知の再武装—人は何をすべきか—」のお誘い

大会実行委員長 安田震一

会員のみなさま、こんにちは。この度、2018年日本国際文化学会第17回全国大会を多摩大学グローバルスタディーズ学部(湘南キャンパス)にて開催させていただくことになりました。大きな責務も感じてはおりますが、皆さまのご協力のもと、心に残る全国大会にできれば幸いです。

多摩大学は1989年に創立し、国際性、学際性、実際性の3つのキーワードを建学の理念として展開してきました。大学院は1993年、そして湘南キャンパスと呼ばれているグローバルスタディーズ学部は2007年に設立された2コースからなる教育機関です。本学部は、少人数制授業、教員と学生の距離が近いという特徴を持った、手作り感溢れる学部です。本学部では1年次の英語教育、2年次から観光学を中心としたホスピタリティ・マネージメント・コースと英語教職課程のインターナショナル・スタディーズ(国際教養)コースに分かれます。その後は、卒業までに実社会で通用する問題解決のための思考力を身に付けて、観光産業、サービス業、物流、外資系企業など、グローバル人材、海外にローカルな事例を発信できる地元密着型人材を輩出するための指導を心掛けております。

また、グローバルスタディーズ学部は留学を推奨し、海外で得た知識およびその体験から自信を養い、その自信を基に社会に貢献してほしいと考えております。さらには留学生との交流によって、多文化を知り、お互い助け合うことなど、寺島学長が推奨する「文献研究とフィールドワーク」、「アジア・ダイナミズム」、「100歳人生をどう生きるか」(ジェロントロジー)という概念のもと、文化の違いを乗り越え、他者に「向き合える」、「歩み寄る」ことができるような次世代の若者を排出するよう日々尽力しております。

第17回全国大会では、多摩大学全体として取り組んでいる私たちの生活の中でのAIおよびジェロントロジーと向き合うこと、基調講演は寺島学長による大会テーマ通りの「知の再武装」を設けさせていただきました。基調講演



では、人材育成を司る大学の役割とは、大学教育がどう関わるのか、再武装と言っても何をいつ今後の人生のために武装するのか等についての講演になることでしょう。その後、基調講演の内容をふまえたシンポジウムを開催させていただきます。

また、今年は第一次世界大戦終了から100年という節目の年であることを鑑み、この期間における日本の歩み、そして今後の方向性を見出せるような自由論題および共通論題などの研究発表が期待されます。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

今年は、エクスカージョンとして「知の再武装」のアンチテーゼとなります記念鑑「みかさ」の見学、徳川家康の外交顧問として知られる三浦按針(ウィリアム・アダムス 1564-1620)の塚山公園(安針塚)、さらには可能であれば、横須賀のドライドックを見学することを企画しております。

最後となりますが、大会実行委員長という大任の名に恥じぬよう、大会を成功させるために精進して参る所存でございます。是非ともみなさまのご指導、ご支援、忌憚のないご助言等を頂戴できますよう、よろしくお願い申し上げます。

第17回 全国大会 開催要領

開催日時:2018年7月7日(土)~8日(日)

開催大学:多摩大学グローバルスタディーズ学部 (湘南キャンパス) 〒252-0805 神奈川県藤沢市円行802番地

【大会会場への交通アクセス】 最寄り駅 湘南台駅 (小田急江ノ島線・相模鉄道いずみ野線・横浜市営地下鉄)

新宿→湘南台 50分 町田→湘南台 20分 (小田急江ノ島線)

八王子→湘南台 45分 (JR横浜線・小田急江ノ島線) 横浜→湘南台 約30分 (相模鉄道いずみ野線)

大会テーマ 「知の再武装—人は何をすべきか—」

第17回全国大会では、「知の再武装—人は何をすべきか—」をテーマに掲げることにいたしました。

今年(2018年)は第一世界大戦終結より100周年、最近では世界に激震を与えたリーマンショックより10年目という節目の年です。昨今は反知性主義など様々な挑戦がグローバル社会を覆っています。また、科学技術・情報通信技術の進化は、従来の経済産業構造や社会、働き方を根本から変革しようとしています。特に人工知能(AI)は、「人間とは何か」という根源的な問いを私たちに突き付けています。私たちは改めて、世界の歩みや日本の立ち位置などを振り返り、私たちが生きる将来を真剣に見据える必要があります。

特に日本は、総人口の4割が65歳以上という未曾有の高齢化時代に突入しました。では、定年退職後の35年間をいかに生きるべきか。現在、新たな人材育成の枠組みや、高齢者が参画できる社会システムの構築など、「老人学(ジェロントロジー)」への視座が求められています。第17回全国大会では、こうした問題意識から過去と現在、そして将来に向き合う「知の再武装」へのプラットフォームとなることを目指します。

共通論題の発表タイトル一覧

※順不同。タイトルは仮題を含む。発表者は代表者のみ明記。

「文化触変論の適用可能性と理論的拡張の試み—アフリカ、東南アジア、21世紀」

代表者: 馬場孝 (静岡文化芸術大学文化政策学部教授)

「スポーツと国民意識の形成—明治神宮競技大会、東亜競技大会、1940年の東京五輪を手がかりに」

代表者: 鈴木裕輔 (法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)

「日本への留学生と彼らのその後—中国・韓国・台湾の比較の観点から」

代表者: 加藤恵美 (早稲田大学現代政治経済研究所次席研究員)

「『二重排除』を生きる『弱者』たち—女性・高齢者をめぐる『排除』の文化・社会的構造の分析—」

代表者: 相原征代 (岐阜大学男女共同参画推進室 特任助教)

「グローバル化する原爆の記憶とその諸相—『ヒロシマ・ナガサキ』の形成と展開」

代表者: 根本雅也 (日本学術振興会特別研究員PD/立命館大学衣笠総合研究機構プロジェクト研究員)

「日欧比較文化再考」

代表者: 松居竜五 (龍谷大学国際学部教授)

エクスカージョンについて(7月6日)

大会前日の7月6日(金)午後にご予定しております。訪問地は神奈川県横須賀市。見学先としては、英国「ヴィクトリー」、米国「コンステーション」と並び、世界の三大記念艦と言われている軍艦「三笠」の訪問、また徳川家康の外交顧問として知られる三浦按針(ウィリアム・アダムス)関連史跡を予定しています。さらには、1874年に完成し、現在もほぼ当時の姿をとどめているドライドック(「横須賀海軍施設ドック」)も検討中です。こちらは在日米海軍基地内にあるため、横須賀市と交渉中です。これら三か所を、午後1時~5時頃に効率よく見学する予定です。参加人数は未定ですが、本学会所属の大学教員・研究者、学生など計20名程度を想定しております。詳細は今後国際文化学会ウェブサイト及びメルマガ等でお知らせいたします。

文化交流創成コーディネーター資格について

ICCO運営事務局 事務局長
常任理事

松居竜五



2014年度に始まった文化交流創成コーディネーター資格(通称ICCO)は、本学会の貴重な資産となりつつある。参加認定校の数も増え、毎年度、順調に資格取得者が輩出している。制度の根幹である短期集中セミナーも、2015・6年度の京都から、2017年度は沖縄(那覇・名護)へと展開し、大きな成功を収めることができた。異なる地域の大学に所属する学生が三人一組で話し合い、一週間かけて一つのプロジェクトを成し遂げる方式によって、毎回個性的な参加者の若い感性が激突し、最終日におこなわれる発表会では、予想を超える成果に驚かされることも多い。

運営事務局としてこの制度に関わっている筆者にとっても、京都や沖縄の豊かな歴史・文化や複雑な社会現象を、参加した学生たちがそれぞれの視点で掘り起こしていく過程をつぶさに共有できたことは、新鮮な知的興奮をもたらす体験であった。ほんの一例を挙げると、京都では、ふだん自分が使っている近所の外食店や自転車店を、町家の新たな利用として取り上げた新潟と佐賀の学生の着眼点に感動させられてしまった。縁切り寺や縁切り神社に調査に行ってきた学生が、怨念のこもった絵馬を



一つ一つ読んだために悪霊に憑かれたような顔をして憔悴して帰ってきた時には、悪いとは思いつつも笑ってしまった。京都のハラール食堂に密着取材してきたグループが撮影してきた、イスラム圏からのお客さんへのビデオインタビューの質の高さには唖らされた。

こうしたユニークな調査による文化の「交流×創成」は、沖縄でも十分に発揮された。今回最優秀プレゼンに輝いたのは、東京と地元那覇の学生のグループによるかりゆしウェアの発表であった。2000年の沖縄サミットの頃から注目され始めたかりゆしウェアは、今や沖縄ではビジネスから普段着まで広く使われるファッションとなった。そのかりゆしウェアの定着が地元でどのように見られているのか、また産業への影響はどうなっているのかなどを、多角的に解明したすぐれたプレゼンである。これまでと同様、この成果は学生たち自身によって、7月の多摩大学での全国大会の際に披露される予定である。

このような短期研修セミナーや本制度の運営を支えているのは、日本国際文化学会の会員のボランティアによる尽力である。特に、学会執行部の他、資格審査委員会、参加認定委員会のみならずには、多大なご苦勞をいただいている。時には、委員会やセミナーの参加のために、個人の研究費を使ったり、自費で来ていただいたりすることもあるのが実情である。こうした負担を少しでも軽減するために、2018年度からの維持費を一団体につき4万円に値上げさせていただくことになった。この措置にご理解いただくとともに、今後のICCOの運営に関して、さらなる学会員の参画を得られれば幸甚である。

新企画として、国際文化学会で活躍されている若手研究者の皆様にご登壇していただき、ご自身のご研究や将来の抱負についてご紹介いただくコーナーを開設いたしました。

第一回目となる今回は、国際文化学会学会年報『インターカルチュラル』編集委員・理事の鈴木裕輔氏にご寄稿いただきました。

日本国際文化学会への期待と抱負

編集委員・理事 鈴木裕輔 (法政大学)

私が日本国際文化学会に入会したのは2002年のことで、特別研究学生として博士課程への進学に備えていた時のことでした。その後、専攻を哲学から政治学に変更し、2003年4月に法政大学が新設した国際日本学インスティテュートに入学して2度目の修士課程で学び始めてからも学会の活動への興味と関心は衰えることはありませんでした。初めての学会発表の場として2004年に神戸大学で開催された第3回全国大会を選んだことも、毎回の全国大会で報告の機会を得られていることも、実にありがたいものだと思われれます。私にとって日本国際文化学会は主体的に携わっている学会の一つなのです。

博士課程を終えた2008年3月を境に、私の主たる研究の対象は2度目の修士論文と博士論文で取り上げた清沢満之から石橋湛山と『東洋経済新報』及び英語版『東洋経済新報』(The Oriental Economist)に変わりました。ただ、全国大会で石橋湛山を取り上げることは少なく、もっぱら他に取り組んでいる研究の成果を報告してきました。日本国際文化学会の大きな特徴の一つは、様々な分野を専門とする研究者に門戸が開かれているという点です。実際、多分野を横断する研究者が集うことで新たな交流が生まれ、これまでにない研究への取り組みが促進されることは、日本国際文化学会の魅力といえるでしょう。

幸いなことに、私は2015年度から理事を、そして2017年度から編集委員を拝命しております。嘴の黄なる名残が残る私が学会の運営の末席に名前を連ねるのは身に過ぎることだと恐懼するばかりです。それとともに、日本国際文化学会の開放的な雰囲気が可能にしたことだと実感し、このような貴重な機会を得られたことに感



謝するだけでなく、学会の一層の発展にささやかながらも何らかの寄与ができればと願っています。このときに思い当たるのが、日本国際文化学会のさらなる国際化の推進と情報の発信の活性化です。

日本国際文化学会が2001年の発足以来国際文化の振興と普及を、研究と教育の両面において進めることを目的としているのは、学会規約に明記されている通りです。その際、国際文化の国際性に着目し、日本国内に拠点を持つ研究者だけでなく、国外の機関に所属する研究者や外国人研究者がこれまで以上に全国大会で報告し、あるいは『インターカルチュラル』に論考を投稿することは、学会の多様性をより高めることとなります。そして、学会の活動を研究者だけでなく社会全体に向けてより一層伝えられれば、日本国際文化学会の活動がさらに活発になることでしょう。例えば、ウェブサイトの英語版の作成などは、身近な学会の国際化と情報発信力の強化の方法となるかも知れません。

しかし、私一人で実現できる事柄は限られています。それだけに、会員の皆さんと協力し、日本国際文化学会の活動がますます充実するよう、努力してゆきたいと考えております。

全国大会の自由論題を募集します

- 自由論題は原則として個人研究発表ですが、内容により複数の発表者による発表も可とします。いずれも発表時間は質疑応答も含めて30分とします。質疑応答の時間が十分とれるよう、発表時間の目安を20分程度としてください。
- 応募は日本国際文化学会の会員に限ります。ただし、現在学会会員でない方は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得るものとします。
- 応募は、氏名・現職(大学教職員・有識者・企業や団体・研究所等の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記)・連絡先・自由論題発表題目・キーワード(3～5語)を冒頭に記し、発表要旨(40字×25行以内)をつけて、2018年3月末までに学会事務局(jsics@gr.tama.ac.jp)までメールにて提出をお願いいたします。

第8回平野健一郎賞を募集します

「第8回平野健一郎賞」の募集を開始しますので、多数のご応募をお待ちしております。

応募に関しては学会ホームページの「平野健一郎賞規程」をご覧ください。(http://www.jsics.org/hirano.html)

- 応募締め切り 2018年4月30日
- 応募書類 応募書類は審査後に返却いたします。
- 応募結果の発表 第17回全国大会総会において発表し、授与式を行います。
- 応募先 日本国際文化学会事務局宛
〒252-0805 神奈川県藤沢市円行802番地
多摩大学グローバルスタディーズ学部
TEL:0466-82-4141 email: jsics@gr.tama.ac.jp

会費納入のお願い

年度末が近づいてまいりました。2017年度の会費納入がまだの方は、ぜひお振込みをお願いいたします。

学会事務局より郵送済みの振り込み用紙がお手元がない場合は、郵便局のお振込み用紙をご利用ください。その際、ご所属・連絡先・お支払の会費年度のご記入をお願いいたします。

【振込先口座番号】

ゆうちょ銀行 00210-2-138408

日本国際文化学会

※他行等からの振込先口座番号は下記のとおりです。

恐れ入りますが、振込手数料はご負担ください。

ゆうちょ銀行

店名:〇二九(ゼロニキユウ)店(029)

当座 0138408

- 学会会費(4月～翌3月末までの年度会費額)

正会員 10,000円

大学院生 5,000円

学部生 2,000円(学会誌は別途購入になります)

※平成25年度総会により、年会費(10,000円)の支払いに困難を覚える者は、常任理事会宛に会費の減額(5,000円)を申請できることとなりました。希望者は、学会事務局まで理由書をご提出ください(書式自由)。

会費の未納・滞納は、学会運営に大きな支障をきたします。
何卒ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

学会事務局より

学会ニューズレター第38号をお届けいたします。非常に厳しい寒さが続いた冬もようやく終わり、徐々に春の訪れが感じられる季節となりました。多摩大学湘南キャンパスに日本国際文化学会の事務局が移転して早くも1年が経ち、今では通常の事務局業務に加えて、2018年度の年次大会開催校として鋭意準備を進めております。重責に身が引き締まる一方で、まだ不明な点も多く、試行錯誤が続きますが、何とぞ皆様の温かいアドバイスを賜りますようお願い申し上げます。